

日本におけるコハクチョウの越冬生態と現状

神谷 要

(財)中海水鳥国際交流基金財団, 683-0855 米子市彦名新田 665

コハクチョウ

皆さんは、コハクチョウというどのような姿を思い浮かべますか？公園の池で餌をもらう姿でしょうか。それとも、大空を自由に飛び回る姿でしょうか。人は、鳥の生態を思い浮かべるとき、当然ながら自分が観察した様子をその鳥の主な生態と思うものです。しかしながら、実際は別の興味深い生態を持っていることもあります。コハクチョウも、多くの人が思い浮かべるような餌をもらう姿が本来の姿ではなく、ツンドラの広大な平原で抱卵する姿や、湖に浮かび水草を食べる姿こそが彼らの野生の姿です。

ハクチョウの頸はなぜが長い

10年ほど前にコハクチョウの頸がなぜ長いのかということをよく考えていました。ガンカモ類の中でもっとも大型なハクチョウ類は、ガン類やカモ類に比べてとても頸

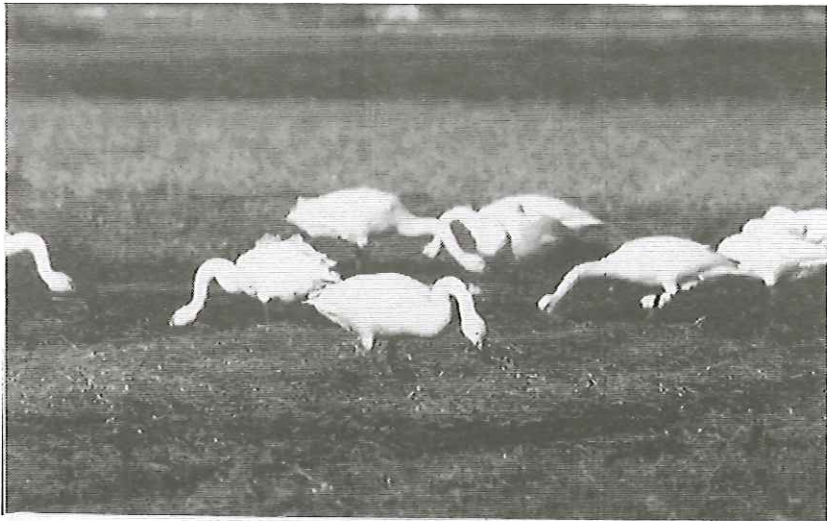


図1. 水田でのコハクチョウの採食.

が長い鳥です。しかし、私の住む中海(島根・鳥取)周辺の水田で草などを採食しているコハクチョウの様子を見ると、何とも長い頸が邪魔そうで、あまり都合のよいものでないようです。

今の職場である米子水鳥公園に勤めるようになり、コハクチョウが水草を食べる様子を頻繁に観察するようになってから「なるほど」と思うようになりました。コハクチョウは、長い頸を使って深い所に生えている水草を食べているのです。

ほかの水鳥ではとどかない水深の場所でも余裕で頭が届き、場合によっては水中に倒立するように頭を入れ、水深90cmほどのところでも湖底の水草の根を探することができます。つまり、コハクチョウの頸が長いのは、農耕地で採食するためというよりは、むしろ水面で水草を食べるのに適している形態のようです。わかりやすくととえるなら、キリンの頸が長くなった理由と同じです。ただ、より高いところではなく、より深いところの餌を探すためという差があるだけです。

さらに、水面での倒立採餌の様子を見てみると面白い事に気がつきます。コハクチョウが息継ぎで頸を上げる合間に、水かきのついた脚で波を起こしているのです。専門書を読むと水かきで湖底に波を起こし、植物の根などを浮き上がらせて食べているとされています。時には、コハクチョウのおこぼれを狙って、潜りの下手なガモ類がコハクチョウのまわりに集まっている様子を見ることがあります。つまり、他の鳥に比べてとても有効な採食方なのでしょう。このようにコハクチョウは、本来水草を食べる鳥のようです。

変化した採食地

しかしながら、私の住む中海・宍道湖周辺では、コハクチョウが水草を食べる様子を観察することはほとんどありません。コハクチョウは、冬の刈田へ飛んでいき、そ

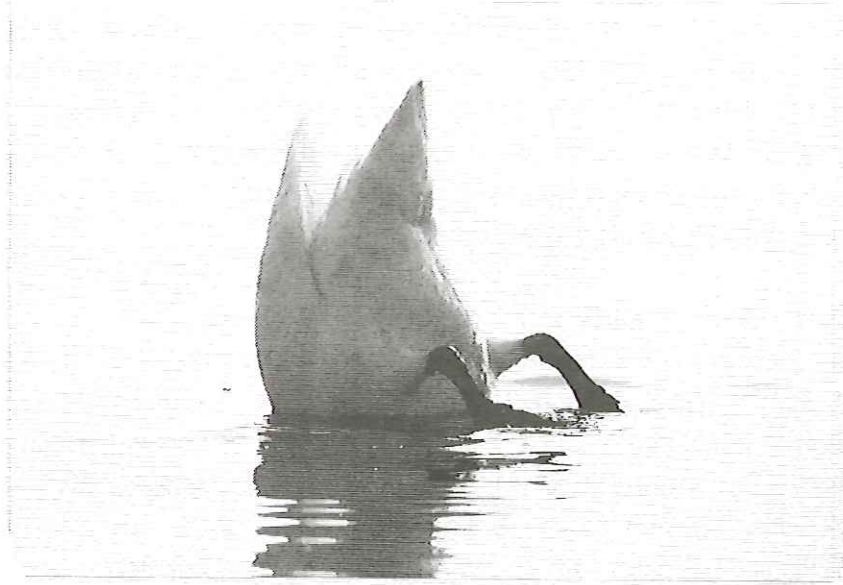


図2. 湖でのコハクチョウの倒立採食)

ここに生育するスズメノカタビラや稲の落ち穂などを食べています。コハクチョウが湖の中で水草を食べていたのは1970年代までであり、1980年代に入ると水田で採食するよう生態が変化しました。

これは1960年ごろから本州の各地の湖沼で水質の汚濁や農薬、水辺環境の改変によって水草が生育できなくなったことと、個体数の増加によって餌不足に陥ったことが原因でしょう。同様な例として、琵琶湖の湖北においても、1990年代からコハクチョウが田んぼに上がって採食する生態が見られるようになってきています。

このように水鳥が採食地を農地に変化させた例は、ヨーロッパでのコクガンが農耕地で採食するようになった事例とよく似ています。また、個体数の増加傾向と連動しているのも似ています。中海周辺におけるコハクチョウの場合、1970年代には100-200羽程度だった個体数が、2006年のシーズンには1800羽まで急増しています。

コハクチョウの大切な生息条件は埒

わたしが住む中海・宍道湖地域では、国が進める中海干拓事業の工区がコハクチョウの埒となり、その工事の進展具合により個体数が増減する様子が見られました。そこで、埒としている場所の一部を米子水鳥公園とし、保護区として水鳥の飛来を維持しています。なぜ、彼らは採食地である水田とは別に埒を必要とするのでしょうか？彼らが埒とする場所は、河川の中州や、湖沼の浅瀬などで、夜間の天敵から身を守るためと考えられています。

コハクチョウは、飛び立つためには、風上に向かって長い距離の滑走が必要です。そのため、危険がある時にすぐに飛びたてるように、広い場所に降り立ちます。採食地としている広い水田は、昼間は見通しもよく絶好の場所なのですが、夜間になると畦などに隠れて近づく天敵がみつけにくくなります。

そこで、コハクチョウたちは夜間になると、水辺の安全性の高い場所に埒として集まります。このように考えると、コハクチョウが本州において越冬するには、採食地となる広い水田と埒となる広くて浅い水辺が必要です。しかしながら、この二つを得られる場所は限られており、特に平野部の狭い山陰地方では、どこでもコハクチョウが越冬できるというわけにはいきませんでした。特に広い水田があっても埒とすることのできる場所は限られてきたのです。

「ふゆ・みず・たんぼ」によりできたコハクチョウの埒

近年、コハクチョウが圃場整備で水を張った田んぼを埒とするという事例がしばしばあります。これは、圃場整備によって広く整備された水田に水がはっていると、まさに浅瀬や中洲のような環境となり、水田の中央にいるコハクチョウにタヌキやキツネが近づきにくくなるからでしょう。このような効果を意識的に狙い、冬の間田んぼに水を張ったものが「ふゆ・みず・たんぼ」です。特に、コハクチョウにとって埒と採食場所がそろうということで大変効果的です。そのため地域によっては、10年程前までほとんどコハクチョウの飛来がなかった地域が、「ふゆ・みず・たんぼ」によ

って突然コハクチョウの飛来地なったこともあります。現在、「ふゆ・みず・たんぼ」は、環境農法として全国的に広がりを見せており、新たなコハクチョウの飛来地ができるかもしれません。

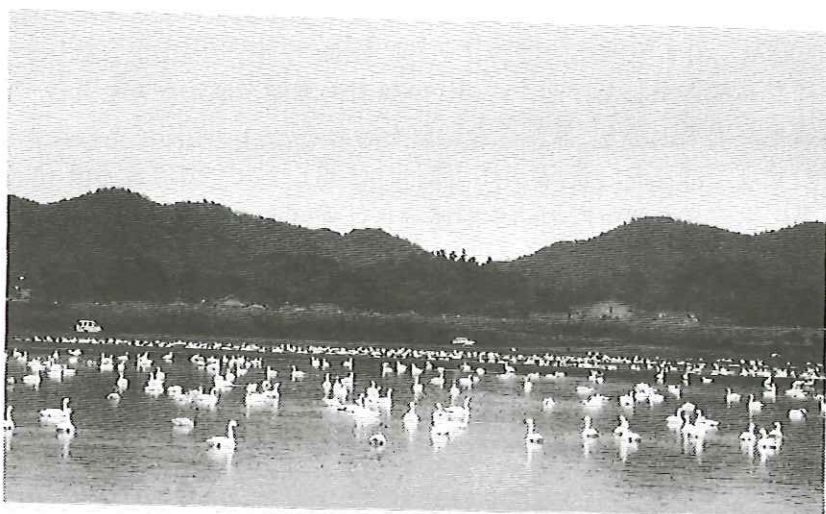


図3. 「ふゆ・みず・たんぼ」をめぐらしているコハクチョウ(鳥根県安来市)

移入種

わたしがハクチョウに関係していることを知ると、最近「私ところにもハクチョウがいて・・・」という話をされる方がよくいます。お話をよく聞いてみると、繁殖しており、餌を見せるとすぐ近くまで寄ってくるといいます。多くは、移入種であるコブハクチョウのことです。私は、ここ数年この鳥の個体数の増加が気になっています。米子水鳥公園では、コブハクチョウがなわばり行動としてコハクチョウを追い払う姿や、夏季に希少な沈水植物を食べる姿が見られます。特に、沈水植物は夏に成長し、それを秋に越冬にきた水鳥たちが食べます。そのため、夏に沈水植物が十分に成長する前に受ける食害は大きな問題です。今後、このような個体が増えないようにするとともに、すでに野外に放たれてしまった個体を取り除いていくことは重要な課題です。すでに同様にコブハクチョウが移入されているアメリカの一部の州では、環境への影響を抑えるために個体数の抑制を始めています。

給餌

今回は、十分に述べる機会がありませんでしたが、コハクチョウを語る上で給餌は重要な問題です。近年の個体数増加は、銃猟できる区域の減少や採食地の変更だけではなく、給餌による繁殖率の上昇も原因として考えられます。また、小さな池でコハクチョウへの給餌を始めたために、池に生息する絶滅危惧種の魚がいなくなってしまうということが起きた場所もあります。気がついていないだけで他の希少動植物に影響を与えている可能性も否定はできません。さらに近年は、水田の転作により、コハ

クチョウによる麦の食害なども起こっています。わたしは、給餌に関して社会的・文化的価値は認めているのですが、生態系に対して様々な影響を与えるので地域全体での環境モニタリングと管理(コントロール)が必要と考えています。しかしながら、わたしが現在問題であると感じているのは、その給餌場所の増加です。従来からの給餌地は、生態系に対する考えの進展とともに給餌の制限や中止をしたりする例が見られるようになってきました。ところが、関係者の理解が進んだところに、別の場所で新たな給餌地が出来上がり、無制限な給餌を始めるといった例が見られます。これでは、地域での管理とは程遠い状況です。餌付けに関しては、環境省の第10次鳥獣保護事業計画書にも安易な餌付けの防止が述べられていますが、一歩進んで給餌の許認可方式の法整備が必要でしょう。なぜならば、野生動物への給餌において問題が起こったとき、現状では行政が給餌に対してコントロールする権限を持っていないからです。給餌行為についてすべてを否定はしませんが、しっかりとした環境の事前調査と影響に対するモニタリング調査をおこない、都道府県レベルの広いエリアでその影響は管理されるべきです。

まとめ

コハクチョウは、戦後の日本において個体数を増やした稀な鳥です。しかし、中海・宍道湖では、湖面で採食する様子はほとんど見られなくなってしまいました。私としては、いち早く中海・宍道湖の沈水植物群落が回復し、コハクチョウが湖面で採食する様子を見たいと思っています。

<「私たちの自然」第48巻, N0532:2-4, 2007, 12月号からの転載>